

9月5日(金) シンポジウム第1室(15号館101)

JACET 第36回全国大会

シンポジウム アブストラクト

英語とコンピューター—Humanities Computing の試み English and Computers : An Introduction to Humanities Computing

司会 鈴木千鶴子 (純心女子短期大学)
提案者 上村俊彦 (長崎県立女子短期大学)
濱田洋子 (純心女子短期大学)
塩津敏彦 (長崎ウエスレヤン短期大学)
牟田美信 (長崎短期大学)

Chair : Suzuki, Chizuko (Junshin Jr. College)
Panelists: Uemura, Toshihiko (Nagasaki Prefectural Women's Jr. College)
Hamada, Yoko (Junshin Jr. College)
Shiotsu, Toshihiko (Nagasaki Wesleyan Jr. College)
Muta, Yoshinobu (Nagasaki Jr. College)

趣旨: JACET「英語とコンピュータ研究会」(九州・沖縄支部)の活動成果を基に、人間とコンピュータ、人文科学とコンピュータの関係を明らかにしつつ、大学における人文科学・言語・英語の研究および教育の改革への応用の可能性を提案する。

従来は最も隔たった存在であった「人文科学」と「コンピュータ」は、日常生活および教育現場におけるコンピュータの普及に伴いいつの間にか共存の時代を迎え、ワープロなどの文書作成機能、言語や文学研究の数量処理、プログラム学習などのCAIまたはCALLとして、およびインターネットによる教育研究情報収集交換の道具としての関係が築かれてきている。本シンポジウムでは、それら電子文具もしくは分析ツールとしてのコンピュータ利用機能を超えて、さらに両者の関係を「人文科学」の主体的かつ本質的観点から開拓する方向性を提示し、「人文科学」のより積極的發展に寄与したい。

はじめに、情報化社会の中での「人文科学」の領域と特性および在り方を、「情報」「知識」「知性」「知恵」の関わりの中で、「データ集積型の知識を蓄積する学問」から「探索・選択・判断により得られた情報から洞察・思索し、自身の考えを発信しながらコミュニケーションし、人間の生き方についてより高次の見解を創り上げていく過程」として据え直す。そのような文脈の中で、「コンピュータ」を人文科学に臨む一人ひとりの「情報処理および思考と認知活動を促すもの」として捉える。具体的には、そのような研究と教育を開発するシステムとして、また知的インターフェイスとして、かつデータを処理する方法をデータ化するものとして捉え、「人間」と「言語」、そして「言語」と「文化」との関わりを創造的な

9月5日(金) シンポジウム第1室(15号館101)

ものとするサポートシステムとしての使い方の実例を検討する。それは、Humanities Computingの将来展望を具体的に示すことになる。

そのような取り組みによって、昨年度のシンポジウム「大学の英語教育を問う」で引用されていた「…人間全体、文化の創造にかかわりをもつような大きな言語を見据えた英語教育…」の実現にもつながることを期待している。また提案者側からは Pro s とか Cons の議論ではなく是非を問わぬ主張として展開し、フロアからそれに対する反論やコメントをいただき、さらに創造的進展がはかられれば幸いである。なお、ハンドアウトでカバー出来なかった資料の配布および時間内に取り上げられなかった議論は Web サイト (9月5日以降 <http://www.njc.ac.jp/jacet.ec/> よりご案内) で行ないたい。

要旨:

ヒューマンイーズコンピューティングの現状と展望

英語教育や英語研究といった「人文科学」領域に、コンピュータを導入することで可能となった教育・研究の新しい視座を中心にお話したい。この発表では特に(1)学術情報へのアクセスの観点から、インターネット上の公開情報にみられる日米間の相違点、(2)コンピュータの機能を生かした集積情報の整理や研究成果の公表について言及したい。(上村俊彦)

機械翻訳と英語教育

機械翻訳によって生成された訳出文には語や品詞、構文の分類、意味の理解に曖昧な部分も多く、正確な解釈をするには人の手になる翻訳作業を加えなければならない。本発表では機械翻訳による不完全な訳文を MT システムとの対話を通して完全な訳文にする過程にあらわれる英語・日本語間の言語現象を英語教育に応用する可能性があることを紹介する。(濱田洋子)

コンピュータと EFL 教育研究

リーディング支援ソフトウェア試作

第二言語運用能力の向上には認知活動の効率化という側面があり、学習者の認知面での変化を観察対象とした研究分野においては、コンピュータの果たす役割は大きい。また、パーソナルコンピュータの普及は、認知活動を促す新たな形態の言語材料を可能にしている。外国語としての英語運用能力、特に理解力の習得に関して、パーソナルコンピュータの普及が可能にする研究・教育方法の事例を紹介する。(塩津敏彦・牟田美信)

9月5日(金) シンポジウム第1室(15号館101)

JACET 第36回全国大会 シンポジウム (Handout)

英語とコンピューター—Humanities Computing の試み

English and Computers: An Introduction to Humanities Computing

鈴木千鶴子(純心女子短期大学) **Chair** Suzuki, Chizuko (Junshin Junior College)

上村俊彦(長崎県立女子短期大学) **Panelists** Uemura, Toshihiko (Nagasaki Prefectural Women's JR College)

濱田洋子(純心女子短期大学) Hamada, Yoko (Junshin JR College)

塩津敏彦(長崎ウエスレヤン短期大学) Shiotsu, Toshihiko (Nagasaki Wesleyan JR College)

牟田美信(長崎短期大学) Muta, Yoshinobu (Nagasaki JR College)

ヒューマニティーズコンピューティングの現状と展望 上村俊彦 長崎県立女子短期大学

I 「英語」とコンピュータ

A 関連図書 B CD-ROM 版レファランス(辞書/ 百科事典/ インターネットディレクトリー 等)

II コンピュータネットワーク環境の利用

A (学術)情報へのアクセス

1. 国内外ウェブサイトの情報収集(大学・学術研究機関/ 出版社・大学出版局/ など)
2. 図書館 (a) レファランスデータベースの利用 (b) 専門書・学術雑誌の論文等の文献検索・利用

B 双方向コミュニケーション

- (1) E-mail の交換
- (2) ニュースグループへの参加
- (3) オンラインショッピング

C 研究成果や(学術)情報の提供

1. ホームページの立ち上げ
2. Cyber Conference(オンライン上での学会開催)の企画・運営

III 米国ウェブサイト

A 検索機能 (1) ウェブサイトのサーチエンジン (2) ウェブサイト内の情報検索

B 双方向コミュニケーション C 関連ウェブサイトへのリンク

D 大学図書館ウェブサイト (1) レファランスデータベースの充実 (2) 文献情報等の検索・利用目録

E 学会ウェブサイト

- (1) 学会情報の提供(関連ウェブサイトへのリンク情報を含む)
- (2) Cyber Conference

F レファランスウェブサイト

G 教育支援ウェブサイト (K-12 education 含む)

IV 課題と展望

A 文書フォーマット PDF (Portable Document Format: アドビシステムズ)

B ウェブサイト評価

- (1) 日本の各省庁 (a) 情報検索機能 (b) ダウンロード可能な情報の種類とそのファイル形式
(c) 省庁間リンク (d) 英語による情報発信

- (2) (大学) 図書館 (1) レファランスデータベースの充実 (b) 文献等の検索機能

(c) 学術雑誌(学内紀要を含む)の電子版の利用状況 (d) 関連ウェブサイトへのリンク

(e) 有料ウェブサイト(国内外学術雑誌・レファランスウェブサイト等へのアクセス権)

- (3) JACET (a) JACET についての情報 (b) 学会開催情報 (c) JACET『研究紀要』等の電子化
(外部からのネットワーク アクセスに対応) (d) Cyber Conference の企画・運営

9月5日(金) シンポジウム第1室(15号館101)

機械翻訳と英語教育

濱田洋子 純心女子短期大学

機械翻訳支援システムによる翻訳下訳作成とその修正のプロセスを英語教育に取り込み、翻訳システムを英語による情報の受信ツールとして捉え直すことを考えた。機械翻訳において、人間のもっている言語知識と機械による支援との融合が図られる。学習者はシステムと対話をしながら、不思議な言語理解の世界に導かれ、さらに、言語そのものとの対話に導かれる。その翻訳をしようとしている二言語の間には次のような難しさがある。(1) 文の解釈、語の品詞や意味、構文、意味構造での曖昧さ、(2) 言語構造の違い、(3) 発想の違い、(4) 概念のとらえ方の違いなどである。学習者は不完全な訳出文に、辞書や修正システム等を利用しながら曖昧さに解決をあたえる。しかし、不完全な訳出文しか出さない機械翻訳は英語学習に応用できるのかという問題がある。この点は英日翻訳ソフトの次のような性質から解決される。(1) 翻訳ソフトの固定性 (2) 電子的テキスト、レファレンスの利用 (3) 不完全な訳出文に対して、学習者の言語の知識をもって 可読レベルの訳文に仕上げるプロセスこそ英語学習の楽しみであり、英語の魅力の発見である。

パソコン利用による EFL 速解力開発研究

塩津敏彦 長崎ウエスレヤン短期大学

第二言語習得をとりまく諸研究のなかで、言語処理速度など認知面の変化を研究対象とする領域においては、コンピュータの果たす役割は大きい。発表者は EFL 理解速度に影響する認知過程の効率化について調べるため実験を行い、その過程でパソコンとフリーおよび市販のソフトウェアを用いた。

その手順として、まず、速読材料をパッセージ単位でスキャナから取り込んで OCR ソフトでデジタル文書化し、エディタで加工できる状態にした。その後エディタ上でパッセージを文単位に分割して、マルチメディア編集ソフト上に転送し、文がつぎつぎに画面に表示されるような一組の動画となるよう加工を施した。その際、各文の表示時間は語数と読解速度の期待値に応じて設定した。この表示形態により、被験者は、各文が画面から消え去って、次の文が現れる前に意味を把握するよう促されるため、好みの速度で詳細な訳を追求する習慣からの脱却を迫られ、瞬時の言語情報処理を繰り返すことによって認知過程の効率化につながる、という仮説を、一定期間練習を続けて検証した。

この実験群の活動の効果を従来型のパッセージ速読練習を使った対照群との比較において分析した結果、文速読テストとリスニングテストのいずれにおいても対照群には伸びがなかったのに対し、実験群には有意の伸びが見られた。

コンピュータの低価格化と一般向けのインターフェースの改善によって個人ユーザレベルでも比較的容易になるこのような言語提示方法や実験形態は、今後、多様化してゆくことが期待される。上記のような研究に再現性が確認されたならば、その結果をふまえて、個々の学習者の習熟度と処理能力に応じて難易度を調節できるような言語提示システムを開発することも有意義と思われる。

リーディング支援ソフトウェア試作

牟田美信 長崎短期大学

- 1 学習者のレベルに合わせて、認知活動を促すいくつかのリーディングに関わるタスクを行い英語の運用能力を高めることを目標とする。 Task 1 : 黙読 Task 2 : 音読
Task 3 : 通訳練習 1 (L2 → L1) Task 4 : 通訳練習 2 (L1 → L2)
- 2 学習者のレベルや学習目的に合わせて素材を柔軟に選択しソフトウェアに取り込み、リーディングの練習を行う補助的な道具として使用する。